

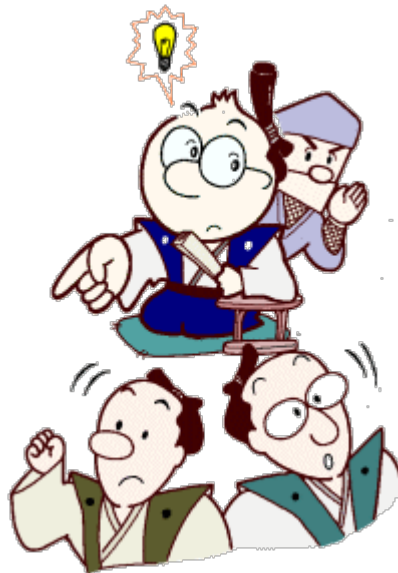
第2章 インテリジェンス編

■インテリジェンスの基本は、情報の収集と分析

私(篠原)が日本メーカーに在籍していた頃は、イケイケの時代であり、市場にはニーズが転がっていたから、何を作ればよいかを思い煩うことは無かった。その頃から比べると、今やモノづくりに携わる人々にとっては、環境は極めて難しいものとなっているように思える。何を作れば売れるのか見えてこなくなり、また、自社の有する技術がこれからも活躍する場があるのかどうか、見えなくなっているのではないだろうか。

その原因は、世界の状況が劇的に変わってきたからである。だからこそ「インテリジェンス」の力が必要であると言える。しかし、危機にあるにも拘わらず、日本人は「インテリジェンス」の力が弱まっている。

インテリジェンスの基本は情報であり、集めた情報が少ないと話にならないが、同時に、どの観点から眺めるかの分析手法も大事である。手法は学問的にいえば自然科学と社会科学に大別できるが、社会を眺める社会科学もこれまでのやり方が通用しない時代になっているから、ここにも厄介な問題がある。インテリジェンスについての私見を述べていきたい。



1.「情報は資源である」というレポートが、

1970年代に米国で発表されていた

申し訳ないが、このレポートの存在を紹介した書籍名と著者名を覚えていない。その内容は、経営者・リーダーは情報を効率的かつ創造的に使うべき、即ち情報マネジメントを新しい面から見られるよう教育、訓練されるべき、と記述されていたと思う。「情報は競争上優位になること保証付きである」「情報は間違えた投資を防ぐことができる」「情報は、世の中の変化を素早く読み取り、その変質に気づき課題を先取りするのに使える」等。それらの課題を解決するのも、未来を創りだすのも情報である、と。

これもまた古い資料であるが、ある米国大企業の中央研究所が、所員に対して“どうしたら研究所の創造力を高めることができるか”を質問したそう。38%の研究者は、考える、あるいは調査する時間が欲しいと答えている。また 20%は、研究所内のグループ間の、横のコミュニケーションや共同の必要性を挙げている。14%は、所外の情報が不十分であることを挙げている。これら上位三つの答の表現はそれぞれ違っていても、いずれも創造的な活動を行うために自身の携わっている分野、及び他分野の情報やその「整理・解析」が不十分であると痛感していることを示しているのではなからうか。日本企業で同じアンケートを取っても、恐らく大差のない結果が得られるものと思う。(久里谷レポートを、一部引用)

What we can do to enhance creativity at WRC?

- 38% Need more time to be creative*
- 20% Cross-fertilization - work together, interdisciplinary groups*
- 14% Need more exposure to the Product Lines, attend more outside meetings, learn more about new technologies*

What are you doing when you get your best ideas?

- 16% Quiet home activities
(Relaxing, showering, shaving, listen to music)*
- 13% Driving a car/traveling on airplane*
- 12% Discussing thoughts with others
(co-workers, customers, etc)*

2.インテリジェンスの基本は、全体を眺める能力

表題で述べたとおり、インテリジェンスの力は情報収集能力と情報分析力、そして状況と分析結果の表現力(報告力)ということになるだろう。インテリジェンスの最初の作業は情報の収集、そして、その次に来るのが、その情報がホンマものかどうかを判定する作業となる。いずれにせよ、基本的に必要な能力は、時間と空間(場所)の全体図を眺めることができる力といえるだろう。

この全体を眺める能力は、時間においては「今」、場所においては自分の今居る「ここ」を軸として生きており、それを軸として眺めることを文化の基本としている日本人には、身につけることがなかなか難しいものとなっている。

このことは、何かを作り上げる時に、われわれは部分から作り始めるのが一般的であり、アーキテクチャーと呼ばれる全体の構造設計を苦手とすることにも現れている。例えば、マイクロプロセサのアーキテクチャーは描けないが、その部分である半導体メモリーの改良はお手のもの、というようなところにも現れる。

また、例えば発明の権利を要求する特許仕様書においても、その発明が全体のなかでどこに位置しているのかを明らかにしないまま、突然発明そのものの説明から始める、なんて事にも現れている。

全体の中の位置を確認することがインテリジェンスとすれば、それに基づく策、すなわち戦略はその全体の中でいかに勝利するかを考え定めるものとなる。日本では、政府から企業まで、「戦略」という言葉が大好きでそこら中に溢れているが、本当に「戦略」という名に値するものが少ないのは、全体把握の必要性が理解されていないことによるのだろう。



3.「研究・開発(R&D)部門」に不可欠なインテリジェンスの力

1980年代のはじめの頃、シリコンバレーで先進の文書処理システムの開発をしていた時の話である。あるとき、ロス・アンジェレスのアナハイムで恒例のコンピュータショウが開催された。当時日本から若手のエンジニアが常時7-8人は来ていた。開発部隊のリーダーと相談して、せっかくのチャンスだから、開発作業はちょっと中断して、全員で最新のコンピュータ技術の見学に行こうと決め、ツアーを計画して実行した。

至極、当たり前のことをしたつもりだったが、これが後で総務部門からのクレームを頂戴することになった。研究開発に直接関係しない行動に出張費用は認めない、と。「研究・開発(R&D)」という仕事は、本社のスタッフ部門には理解されていないのだ、という教訓だけが残ることになった。

研究・開発は、アメリカでは「R&D: Research and Development」と呼ばれている。文字通り、その出発点はリサーチにあり、自分が今から取り組もうとしている開発主題、開発分野に関する世界の過去の実績と現状を調べることから始まる。リサーチは文献による調査研究がメインとはいえ、直接話を聞く、自分の目で見るという作業も重要であることはいうまでもない、と考えていたからだ。

技術開発におけるインテリジェンスの不足は、日本の病気みたいなものである。戦後40年の間、目の前に追いつき追い越せの対象物が厳然と存在していた時には、その周りまで見渡す必要はなかったので、インテリジェンス不足は問題にはならなかったが、追い越してしまうとお手本はないわけだから、手探りで進むしかない時代がすでに20年近く続いている。それなのにインテリジェンスの軽視は昔のまま、あるいはもっと事態は悪くなっているのです。このままでは画期的な開発製品はあまり期待できないだろう。

余談だが、インテリジェンスが不足しているから、せっかく発明をしても、その発明がその属する技術分野の中でどこに位置し、今までの技術と比べて何が画期的なのかをはっきりと説明できない場合が多いようだ。(特許明細書)を読んだ感想)。欧米のエンジニアは、リサーチの力と自分が行った研究なり発明なりを明確に表現できなければ、一流と認められない。一方、日本では黙々と、研究所のなかで手を動かして、なにやら忙しく「働いて」いれば、ムラの長老の覚えもめでたいことになるようだ。

4.ヴェネチアは、インテリジェンスの手本

この素晴らしい本(海の都物語:塩野七生)のおかげで、ヴェネチアという小さい国の大きな存在、大航海時代が始まる前までの地中海の女王の姿が「全部」わかる。この小さな国の豊かな国力は地中海を舞台にしての貿易、地中海の先は遠くインドや中国との交易品の扱いによる。その地中海ナンバーワンの貿易を可能にしたのは、巧みな外交政策であり、その外交を可能にしたのは、各地の状況をリアルタイムで把握するインテリジェンスであった。

この本によると、ヴェネチアから各国に派遣されていた大使からの「レポート」の客観性(感情を交えず冷静に観察する)と正確度は当時の世界水準をはるかに超えるものであったらしい。ヴェネチアはどのようにして、当時世界最高水準のインテリジェンスを持つことができたのだろうか。一番の要因は、宗教的感情で目が曇ることがなかったことにあるだろう。キリスト教国ではあったがイスラムの国々と貿易するのに躊躇することはなかったし、それ以上に、宗教の違いで人を色眼鏡でみることがなかったようだ。

この宗教差別なし、人種差別なしの姿勢は、もちろん商業第一の功利から出ているのは間違いないにしても、根底にはもっと別の、それを当たり前とする文化あるいは普遍的な感情があったのではないだろうか。それは、一言でいえば、ギリシャ・ローマ文明から続く地中海文明によるものではないか。すなわち、宗教と人種と文化の多様性を当然の事実として受け止める普遍的感情が地中海世界では受け継がれて来ていたからではなかろうか。

世界には様々な背景を持った人間がたくさん居る、ということを前提(当たり前)として、世界を見る眼と、多様性を理解できない、すなわち多様性に出会う機会が少ない地域に育った人の眼とでは、物事の正確な把握と報告において、格段の差が生まれるのではないか。

更にインテリジェンスには「勤勉」という要素が欠かせない。貿易で生きてきたヴェネチア人が勤勉であったことはまちがいない。人口の少ない国だから、「全員出動」で誰もが自分の能力に見合う仕事をわっせわっせとこなしていた。ともあれ、ヴェネチアのインテリジェンスは、色眼鏡を掛けないで状況を観察し、感情をできるだけ混ぜないで枯れた筆致で報告する重要性をしめしてくれている。

5.「華僑」の情報網は、インテリジェンスに値する

昔、仲間との他愛のない話の中で、もし地球がとんでもないことになった時に、最後まで生き延びる民族は誰だという話題になった。何をディスカスしたかは忘れたが、席上の全員一致の結論は、最後まで残るのは中国人であるという結論になった。

40年近く前、スペイン船籍のおんぼろ貨客船（戦前の移民船）でイタリアのジェノヴァ（Genova）からメキシコのベラクルス（Veracruz）まで旅をしたことがある。船がジブラルタル海峡（Strait of Gibraltar）を抜けての最初の寄港地はカナリア諸島（Islas Canarias）のテネリフェ（Santa Cruz de Tenerife）であった。この諸島はアフリカ北西部のモロッコの沖合いにあるスペイン領である。

短い寄航時間の間に港町をぶらついて驚いた。中国人の店がたくさんあったことに。私の感覚ではなんとなく世界の果ての孤島という感じであったのに、こんなところにも中国の人は店を構えているのか、という驚きである。この驚きは、船がカリブ海に入って、キュラソー島（Curacao）、プエルトリコのサン・フアン（San Juan, Puerto Rico）、ドミニカ共和国のサント・ドミンゴ（Santo Domingo, Republica Dominicana）と寄っていくたびに重なっていった。この調子では、世界のどこに行っても、中国の人が根付いているのではないかと思わざるをえなかった。

この地球上でひっくりめて「華僑」と呼ばれる、中国本土の外で永住している中国人がどれだけの数がいるのか私の知るところではないが、世界の果てにまで住み着いている印象からすれば、膨大な数であろう。

彼らの強さは、精神的なものだけでなく、お金もたくさんたくさん持っている。お金を生み出す元は「情報」であるから、華僑の世界情報網はこれまた世界一、ということになるのではないだろうか。もちろん彼らの情報は華僑全体に満遍なく流れるものではなく、血縁・地縁によって水平に何階層にもなって流れているのだろう。世界のどこに住んでいようが、どのような会社や団体に属していようが、血縁・地縁をベースにした集団の中では、最新の情報が駆け巡っていることだろう。

この華僑の情報網と合わせると、中国が有するインテリジェンス・ネットワークは、多分間違いなく、世界最大と言えるのではないか。サテライトなどによる自然科学系の情報を別にして、こと政治・経済・社会という分野では最大であろう。彼等に比べ我々日本人は、どうだろうか……………。

■日本人のインテリジェンス能力を考える

—日本人は何故、インテリジェンス力が弱いと言われるのか—

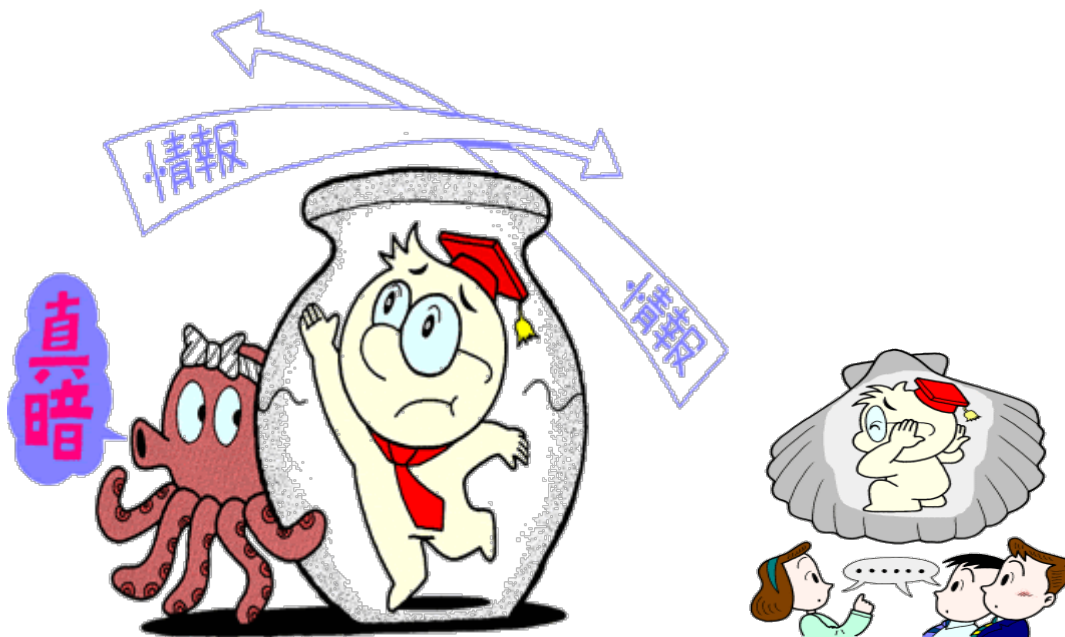
「むら」という共同体(現代では会社など)で生きてきた日本人は、その眼がどうしても内に向いてしまい、なかなか外に向かない。また時間においても、その「むら」のなかで過去にさかのぼって原因追求などしていると、何を遊んでいるのだ、そんな暇があれば田圃の草でも取れ、と上司からお叱りを受けたりすることにもなる。

このようにみえてくると、我々日本人がインテリジェンスに弱いのは当然のところ、その能力を高めるためには、意識して努力することが必要となる。鎖国をして、日本列島の内で静かに穏やかに生きていけるのであれば、何もインテリジェンスは必要ないが、厄介なことに、そうは行かなくなったのがこの150年である。したがって、どうしても、世界の中でどこに日本が居るのか、近代という歴史の中で、今どの時点にいるのかを確認し続けることが必要とされている。

しかし、全体図の把握に弱いのが日本人の特徴であるという、それは言いすぎであり、何度も書いてきているように、武門の人々が力を握っていた時には、全体把握に怠りはなく、従ってインテリジェンスにも不足はなかった。とはいえ、なぜか、この特質は日本全体に普及することがなく、それが「文化」といえるレベルまで一般化しなかったのも事実である。

敗戦の時から20年ほどは、世界の中の日本を痛いほど意識し、西洋世界、特にアメリカとの比較をしながら懸命にもものづくりに励んできた。その時には、それなりのインテリジェンスがあったが、そのあとの20年は調子が良くなったものだから、眼がすぐに内向きになり、「夜郎自大」の悪癖がぶり返し、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」などと舞い上がってしまったのは、ついこの間のことである。敗戦の教訓も結局体質までは変えることがなかったことを示している。

結局、我々日本人は、その一般的な特質として、世界の歴史の中での位置づけ、世界という地理の上での位置づけを、客観・冷静に眺めることができないままにきている。卑下することもなく、傲慢になる事もなく、あるがままに眺めるという姿勢は、一般的な日本文化としては根付くことがなかった。せつかく外に打って出ても、なにか事があると、安穩な「むら」の中に逃げ帰り、その中では例え失敗をしても「まことに申し訳ございません」と深々と頭を下げれば、それで幕は引かれることになる。



1.日本の歴史から見てとれるインテリジェンスの興亡

日本の歴史について、以前にも書いたが、公家と武家による支配権の取り合いで綴られており、さらに言うならば、武家は結局お公家衆に取りこまれていく繰り返しを示している。武家、すなわち武門の人々の勢いが強かったときには、「インテリジェンス」とそれに基づく「論理思考」が表に出てきている。論理的思考の出発点は事実の把握、すなわちインテリジェンスであるから、この二つは切り離しては考えられない。

先ず源平争乱のときであるが、平清盛は武門棟梁の目と考えを失わなかった。福原(神戸)への強引な遷都も、一門の公家化を押さえるためもあったろうが、何よりも、貿易国家、特にお隣の大国「宋」との貿易の拡大のためであった。つまり貿易に目をつけるだけあって、海外の出来事への関心、その情報の入手に熱心であったのだろう。

この平家を倒し、日本で初めて武家政府を打ち立てた源頼朝とそのバックの北條一門は、海外に国を開く発想までは持っていなかったとはいえ、国内の状況把握は的確なものであったようだ。南は遠く薩摩まで守護・御家人を送り込み統治に成功したのは、並々ならぬ正確な情報の把握があったといえよう。御家人の全国配置は、全国各地からの情報が即座に入

ってくる情報網の完成でもあった。元寇の役の時も、対馬の守護宗氏を通して中国大陸の情勢は事前に相当に察知していたのではないか。

インテリジェンス力が高まったのは、次いで、戦国時代であり、信長と秀吉を先頭に、伊達政宗やキリシタン大名のインテリジェンス力はいしたものであった。欧州の大航海時代に対抗できるだけの海外知識を得ていたし、武門ではないが堺の今井他の大商人達の情報網もたいしたものだ。

徳川幕府による鎖国で200年眠っていた後、幕末は、再びインテリジェンス力が上がったときであり、公家化していなかった下級武士・郷土層を中心とする人々の敏感な反応と動きのおかげで、独立国を維持することができた。明治維新の後の急激な翻訳本の出現は、彼らの危機意識の反映でもあったろう。西洋の事情を知らなければやばい、との意識が翻訳本の洪水となって現れたのだろう。しかしそれも1905年の日露戦争までで、その後太平洋戦争の敗戦までは、異常なレベルまでインテリジェンス軽視のときであった。武門の人々が公家化していった40年である。

2.インテリジェンス、あるいは戦場の報告

インテリジェンスへのニーズは、生き延び、敵に勝つためにある。かつて、ユーラシア(欧亜大陸)の遊牧民は、馬や羊の餌になる草のありかを的確に知ることが命がけであったという。族長の最大の責任は、春から夏にかけてどこへ行けば草が青々と茂っているかを見極め、行く方向を決定することにあつたという。それに失敗すれば、一族郎党は行き倒れになりかねない。各地の情報集めには必死であつたろう。

この情報集めの伝統を受け継いでいるのが軍隊であり、貿易商人となる。敵のこと、商売相手のことを知らなければ、仕事にならないから当然であろう。

前の戦争において、日本帝国陸海軍ともに、いかにインテリジェンスを無視していたか、一つの例証は、日系二世の兵隊(兵も将校も)がいじめの対象となっていたことにも現れている。敵の言語である英語に精通しているバイリンガルの二世兵は貴重な存在であるから、大いに優遇されたであろうと考えるのが普通であると思うが、実際は、どっこい、まるで反対で、「敵性の英語」をペラペラしゃべりやがって、アメリカかぶれのとんでもない奴だと、部隊の中で「イジメ」に会うことになる。

敗戦の復興を担ったのは製造業の人々であり、彼らは武門の人と呼んで差しつかえないであろう。アメリカを中心としての西洋事情にもう一度敏感になり、工業化のレベルを追いつき追い越していった。しかしそれも40年で幕を引く。その後、今に至る20年は、お公家衆の支配が復権して、同時にインテリジェンスを軽視する姿勢も復活することになった。

この20年、国家の経営を担う人々から企業の経営を担う人々まで、そして民衆まで、日本を挙げての知性の劣化は、インテリジェンス力の劣化の裏返しである。状況の把握を怠れば、考えなければならぬ課題も出てこない。課題がでてこなければ、対策を考える必要も無い。対策が考え出されなければ行動もそこには無い。国を挙げて、焦点の定まらぬうつろな目をして、口を半開きにしてボウとしている顔つきになってしまっている。

武門の人々はパーズ食らって地下にもぐってしまったのだ。アメリカや中国でビジネスをしているのに、かの地のことを知ろうともせず、日本でのやり方がそのまま通用するが如く日々目の前の業務をこなしている姿をみるにつけ、不思議の世界に迷い込んだ気がする。

3.特許仕様書(明細書)から見える日本の「インテリジェンス度」

日本の特許仕様書(明細書)がなぜ、読んでも意味が取れない、奇妙な文書になっているのかを、あれこれ考えているなかで、「日本では、発明の内容が真似されないようにできるだけ曖昧に記述する」ことが、特許関連の村落の中では、「実践され推奨されている」という話を聞いた。話を聞いたときは、マサカ、嘘だろうと思ったが、同じことを言う人にその後何人にも会ったので、どうやら本当の話らしい。凄まじくも不気味な話である。

特許は、独占権利を一定期間得る代わりに、発明の情報はできるだけ明確に開示することになっている。これは多分世界共通の原則であろう。したがって、発明の内容がバレないようにできるだけ霧のなかに包んだ形で記述するという態度は、そもそも、特許という理念に反し、仕組みに反し、より具体的には、「特許法」に違反していることになる。

さまざまな人間が、社会の中で生きていくためには、そこに「ルール」が必要であることは、原始社会の時から認識され実施されてきたことである。気に食わなくとも、定められているなら、それに従うのが社会人としての基本である。ルールがおかしい、良くないと考えるのなら、それを改定するべく行動を起こすのが筋であろう。

発明が真似されるのが怖いなら、特許出願をしなければ良いだけの話である。特許を出せと、第三者に頼まれた、脅迫された訳ではないのだから、自分でしなければいいだけの話である。特許の理念に反し、ルールに反して、できるだけ発明を曖昧に記述して提出することを実践している人たちが、本当に存在するのなら、その存在はまことに「不気味」である。外国人でなくとも怖い。

このルール違反が国内特許の世界だけで収まっているなら、世界にバレることもないので、身内の問題で片付けることもできるだろう。しかし、その、意図しての曖昧記述の特許仕様書を英語に翻訳して外国に提出されると、ことは国際問題となる。

特許を取得したいという欲望と、発明の内容はできるだけ隠しておきたいという願いは両立しない筈だ。

発明を隠しておきたければ、特許出願をしなければいいだけの話であり、ことは極めて単純である。特許を取りたければ、日本の特許法でも米国の特許法でも同じように定められているように、発明は分かりやすく開示されなければならない。

二つの相反することを両立させようとするのは、ビジネスの世界で生きてきた者としては、信じがたい行為である。世の中そんなにうまい話は無い。このような単純にして明らかな事実に対して、発明の内容がなるべく分からないようにあいまいに記述する、ということが行われているのなら、なぜそのようなバカバカしいことが長年なされているのかを考えざるを得ない。

この二つの相反することを成立させようとする努力は、社会的に極めて未熟な頭から生み出されたものではないか。ビジネスの世界で生きていない人々の行動ではないか。理屈を超えて欲しいものをなんとしても取るという態度は、社会心理学的に言えば、極めて幼児性の高い行為といえるかもしれない。

もし、分かりにくく書くことを自分の優れた技能だと考えている人がいるなら、それは止めてもらいたい。社会的に害を撒き散らしていることになるから。

なぜかと、考え始めたのだが、どうも明快な分析ができない。信じられないような行動をとる人々を分析することは、なかなか骨が折れる作業である。



あとがき

”企業の過度な効率主義とノルマによるリストラは、リスクを負う”、と 言う

久里谷(故人)さんと篠原さんの両人が危惧されていることが実際に起きている。発明くんが、リストラの原稿を整理している最中にも企業の不祥事が新たに起きている。



◆ .2022/06/23 朝日新聞朝刊 けいざい+

三菱電機の「改革」 上 ソニーが手本 リストラ懸念も

三菱電機ではここ数年、社員の過労自殺死や品質管理の不正といった不祥事が、次々と発覚。背景に「『上に物が言えない』という閉鎖的な企業風土があると指摘されてきた。新社長の初心表明で「誰もが自発的に行動できる風土を醸成し、仲間や組織としての一体感、心を震わせるような共感呼び起こしながら、力強く前進できる会社を創っていきたい」と訴えていたという。つまり、経営トップが現場との距離を縮め、社員の自発性を引き出すという趣旨である。(原文)

< 自信を喪失し、実力を発揮できなくなった社員たちの心の奥底に隠された『情熱のマグマ』を解き放ち。チームとしての力を最大限に引き出す > 著書:「ソニーの再生」

ソニーの改革は、当然ながら人員削減などの痛みが伴っていたはずだ。三菱電機社員は、「リストラありきの改革基本を押し付けようとしているのでは」、という不安を抱えている心情も取材されていた。

◆ 2022年9月4日朝日新聞

日野自、来夏まで生産停止排ガス不正車種 小型、来月再開見込む

日野自動車が生産停止期間の見込みを明らかにしていなかった。対象車種は出荷再開にむけて国土交通省の許可を得る為の試験などに時間がかかると見込む。取引先の部品メーカーなどの業績への影響も大きくなりそうだ。

◆ 2022年9月30日朝日新聞

かっぱ寿司社長ら逮捕へ はま寿司の元取締役 はま寿司の秘密 不正取得容疑

回転ずし 大手「かっぱ寿司」を運営するカッパクリエイト(本社・横浜西区)の田辺公己社長(46)が、競合する大手「はま寿司」の営業秘密を不正に取得した不正競争防止法の疑いがあるとして、警視庁は29日までに田辺社長ら3人の逮捕状を取った。30日にも逮捕する方針。法人としてのカッパ社も同容疑で書類送検される見通し。

”今の日本人は、インテリジェンス能力を身に付ける努力が足りない”と言う、

インテリジェンスについて、これまでは何となく分かっていたつもりでいたが、下記のテレビ番組で、インテリジェンスとは何か、その具体的なことが見えた気がする。発明くんは、このテレビ放送を観るにあたって、まずは時代背景(歴史)を知ること、そして

登場する人物の、1. 情報収集能力と分析能力 2. 課題解決策を模索する創造力(想像力) 3. 意見・考えの違いがある人との対話力 4. 協力者の支援が得られる人間力と説得力 5. 行動を起こす勇気と実行能力などに焦点を当てた。



◆ 2022年10月01日 NHKBS プレミアム 7:30~9:00(後編)

日中 2000年 戦火を越えて、周恩来の決断 田中訪中の真相(後編)
”民を似って、官を促す”

周恩来首相は、日本への留学経験があり、戦後日本の経済を支えてきた日本の「ものづくり技術」を高く評価していたという。日本からの技術支援を受けるには、先ず、「日中国交正常化」が必要である。

一方、日本は先の侵略戦争で中国へ与えた甚大な被害に対する中国への損害賠償問題を抱えており「日中国交正常化」の道のりは遠かった。

そんな状況の中でも、一部の知識人たちの努力で「日中文化交流」が行われた「日中文化交流」に携わっていたのは文化人だけでない。大陸に渡り、様々な思い入れを持つ政治家や官僚、更に経済人達も支援した。

対米従属の岸政権になると、この「日中文化交流」は中止された。しかし、その後、中ソの国境問題で起きた「中ソ紛争」が、この流れを変えた。アメリカが「対ソ」対策として中国へ接近した。

日本は、アメリカに気兼ねすることなく「日中文化交流」を復活することができた。そして、損害賠償金は請求しないという中国政府の見解のもと、「日中国交正常化」への道が開けた。ここから「田中訪中の真実」について話が進む。

その中で、田中演説の“～大変な迷惑をおかけした～”という曖昧な言葉の軽さが中国側を不快感にさせたという語りがあった。田中(総理大臣)を支えてきた大平(外務大臣)が、中国の渉外責任者と翻訳者に対し、田中(日本)の本意は、“……………”である、と伝えている映像があった。

発明くんが思うに、日中お互いの背景と言った全体から語れる論理力、そして分かりやすい、誤解を生まない(翻訳しやすい)責任のある言葉で、伝えていたに違いない。なぜなら中国側は大平さんの一言、一言に頷いていた。いまの政治家たちは、背景の違う人達を納得させるインテリジェアンス力をお持ちであろうか。

因みに「前編」は、2022年9月24日 7:30~9:00に放映された。

新事実！戦争後国交回復の物語 白村江戦後の遣唐使 則天武功の意外な思惑 足利義満の屈辱外交の謎 徳川吉宗と康熙帝(こうきてい)秘話 国交なき沈黙外交とは 中国新発掘 ▽浅田次郎

◆ 2022年10月8日 NHK テレビ 4:20~6:00

ニッポンに蒸気機関車が走った日 鉄道開業

▽西郷対大隈

大熊重信は鉄道の推進で伊藤博文の支援を取り付ける。伊藤博文は、イギリスへの秘密留学(*)で蒸気機関車によるイギリス経済(西洋文明)の発展を目のあたりにしている。

(*)幕末に長州藩から派遣されてヨーロッパに秘密留学した、井上馨、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤博文、井上勝の5人の長州藩士。

西郷隆盛は、日本武士を中心とした新しい国作りを目指しており、日本人が西洋文化に憧れ、何もかも西洋化(西洋かぶれ)することで日本の美が失われるという危惧を持っていた。

▽蒸気機関車は海上を走った

品川の地にある薩摩藩の反対で、陸上鉄道の建設は困難となった。海上に鉄道を敷くというアイデアが井上勝から提案された。井上勝は伊藤博文とイギリスへ秘密留学した「長州ファイブ」の一人である。井上勝はイギリスの鉄道工事に従事した経験を持つインテリジェンス能力の高い日本人初の鉄道技師である。

鉄道は欧米の植民地化が目的で投資と経営権は欧米側にあった。しかし日本は、投資は受けるが経営権は自国で、というイギリスの提案を受け入れた。機関車はイギリスからの借物である。

海上鉄道の工事は、難工事であったが日本の土木工事技術(築城・堤防)で完成させた。日本の技術があればこそ日本が経営権を持つことができたとも言える。現在衰退している日本の経済を復活させるヒントがこの辺りにもありそうだ。

▽琉球王国の消滅

鉄道開業を機に明治天皇は、琉球公子伊江(蒸気機関車への試乗招待を受けて感動していた)を皇居に出廷させ日本の華族に拝命し、琉球は日本であることを宣言した。沖縄県の誕生である。この時点で琉球王国は消滅した。(発明くん 2022/10/26)